秀歌十二月

前川佐美雄

筑摩書房

前川佐美雄　（まえかわ　さみお）

1903年奈良県に生まれる。吉野林業・東洋大学卒業。佐佐木信綱門下。歌誌「日本歌人」主宰。朝日歌壇選者。歌集「春の日」「植物祭」「積日」「捜神」「前川佐美雄歌集」等16冊。その他「短歌随感」など。

秀歌十二月　　グリーンベルト・シリーズ　76

昭和40年11月30日　初版発行　　¥ 260

著者　前川佐美雄
発行者　古田晁
発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2—8
電話(291)7651—5振替東京4123
印刷　凸版印刷株式会社
製本　美行製本有限会社

秀歌十二月

前川佐美雄

筑摩書房

目次

一月

初春の初子の今日の…　大伴家持　11
あらたしき年の始めの…　大伴家持　13
はるかなる岩のはざまに…　西行法師　14
年たけて又こゆべしと…　西行法師　16
くやしまむ言も絶えたり…　斎藤茂吉　17
雪の中より小杉ひともと…　斎藤茂吉　18
旅にしてもの恋しきに…　高市黒人　19
吾が船は比良の湊に…　高市黒人　21
君がある西の方より…　与謝野晶子　22
源氏をば一人となりて…　与謝野晶子　24
天ざかる鄙に五年…　山上憶良　25
ひさかたの天道は遠し…　山上憶良　27

二月

はなはだも降らぬ雪ゆゑ…　作者不詳　29
うらさぶる心さまねし…　長田王　31
なづななづな切抜き模様を…　木下利玄　32
山畑の白梅の樹に…　木下利玄　34
沫雪のほどろほどろに…　大伴旅人　35
妹として二人作りし…　大伴旅人　36

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つけ捨てし野火の烟の…　尾上柴舟　38
哀れにも晴れたるかなや…　屋上柴舟　39
暁と夜烏鳴けど…　作者不詳　40
一つ松幾代か経ぬる…　市原王　42
山川に鴛鴦二つ居て…　野中川原史満　43
幹ごとに花は咲けども…　野中川原史満　44

三月

君が行く道の長路を…　狭野茅上娘子　47
塵泥の数にもあらぬ…　中臣宅守　49
鉦鳴らし信濃の国を…　窪田空穂　50
覚めて見る一つの夢や…　窪田空穂　52
あはれなり我が身のはてや…　小野小町　53
つれづれと空ぞ見らるる…　和泉式部　54
君がため瀟湘湖南の…　吉井勇　56
君にちかふ阿蘇の煙の…　吉井勇　57
さざれ波磯巨勢道なる…　波多少足　59
巨勢山のつらつら椿…　坂門人足　61
大空は梅のにほひに…　藤原定家　62
春の夜の夢のうき橋…　藤原定家　63
木に花咲き君わが妻と…　前田夕暮　65
わが妻が女中にものを…　前田夕暮　66

四月

瓶にさす藤の花ぶさ…　正岡子規　68
月やあらぬ春や昔の…　在原業平　71
いちはつの花咲きいでて…　正岡子規　70
白玉か何ぞと人の…　在原業平　72

珠藻刈る敏馬を過ぎて…　柿本人麿　111
荒栲の藤江の浦に…　柿本人麿　113
紫蘭咲いていささか紅き…　北原白秋　114
昼ながら幽かに光る…　北原白秋　116
古に恋ふる鳥かも…　弓削皇子　117
滝の上の三船の山に…　弓削皇子　119
河上の五百箇磐群に…　吹黄刀自　120
うつせみの命を惜しみ…　麻続王　122
真帆ひきてよせ来る舟に…　田安宗武　123
我宿の桃の木の間に…　田安宗武　125
生れては死ぬことわりを…　天田愚庵　126
ちちのみの父に似たりと…　天田愚庵　128

七月

琴の音にみねの松風…　斎宮女御　130
琴取れば嘆き先立つ…　作者不詳　132
山道に昨夜の雨の…　島木赤彦　133
谷の入りの黒き森には…　島木赤彦　135
吾が恋はまさかもかなし…東歌・上野国歌　136
彼の子ろと寝ずやなりなむ…　東歌・未勘国歌　138
豆の葉の露に月あり…　太田水穂　139
雷の音雲のなかにて…　太田水穂　141
君に恋ひ甚も術なみ…　笠女郎　142
今は吾は佗びそしにける…　紀女郎　144
葛の花踏みしだかれて…　釈迢空　145
まれまれに我をおひこす…　釈迢空　147

うちなびく春来るらし…　尾張連　74
春霞ながるるなべに…　作者不詳　76
うす紅に葉はいちはやく…　若山牧水　77
家路には君かへるでの…　若山喜志子　79
石激る垂水の上の…　志貴皇子　80
蝦鳴く神奈備河に…　厚見王　81
指をもて遠く辿れば…　土岐善麿　83
じめじめとこの泥濘路の…　土岐善麿　84
旅衣わわくばかりに…　加納諸平　85
沖さけて浮ぶ鳥船…　加納諸平　87

五月

大空の塵とはいかが…　与謝野鉄幹　89
大名牟遅少那彦名の…　与謝野鉄幹　91
春過ぎて夏来るらし…　持統天皇　92
否といへど強ふる志斐のが…　持統天皇　94
戦死せる人の馴らしし…　土屋文明　95
風なぎて谷にゆふべの…　土屋文明　97
あかねさす紫野行き…　額田王　98
紫草のにほへる妹を…　大海人皇子　100
身はすでに私ならずと…　中村憲吉　101
梅雨ぐもりふかく続けり…　中村憲吉　103
うちしめりあやめぞかをる…　藤原良経　104
幾夜われ浪にしをれて…　藤原良経　106

六月

東海の小島の磯の…　石川啄木　108
灯影なき室に我あり…　石川啄木　110

八月

庭のべの水づく木立に…　伊藤左千夫　149
高山も低山もなき…　伊藤左千夫　151
浦かぜは湊のあしに…　伏見院　152
ゆふぐれの雲飛びみだれ…　伏見院　154
星のゐる夜空ふけたり…　川田順　155
雁一列真上の空に…　川田順　157
大君の加佐米の山の…　平賀元義　158
在明の月夜をあゆみ…　平賀元義　159
大宮の内まで聞ゆ…　長意吉麿　161
苦しくも降り来る雨か…　長意吉麿　162
うつし世のはかなしごとに…　古泉千樫　163
ふるさとの最も高き…　古泉千樫　165
あしひきの山川の瀬の…　柿本人麿歌集　166
ぬばたまの夜さり来れば…　柿本人麿歌集　168

九月

馬追虫の髭のそよろに…　長塚節　170
白埴の瓶こそよけれ…　長塚節　172
妹が家も継ぎて見ましを…　天智天皇　173
秋山の樹の下がくり…　鏡王女　175
おほてらのまろきはしらの…　会津八一　176
毘楼博叉まゆねよせたる…　会津八一　178
暁のゆふつけ鳥ぞ…　式子内親王　179
閑なる暁ごとに…　式子内親王　181
萩寺の萩おもしろし…　落合直文　182
父君よ今朝はいかにと…　落合直文　183

八月

庭のべの水づく木立に…　伊藤左千夫　149
高山も低山もなき…　伊藤左千夫　151
浦かぜは湊のあしに…　伏見院　152
ゆふぐれの雲飛びみだれ…　伏見院　154
星のゐる夜空ふけたり…　川田順　155
雁一列真上の空に…　川田順　157
大君の加佐米の山の…　平賀元義　158
在明の月夜をあゆみ…　平賀元義　159
大宮の内まで聞ゆ…　長意吉麿　161
苦しくも降り来る雨か…　長意吉麿　162
うつし世のはかなしごとに…　古泉千樫　163
ふるさとの最も高き…　古泉千樫　165
あしひきの山川の瀬の…　柿本人麿歌集　166
ぬばたまの夜さり来れば…　柿本人麿歌集　168

九月

馬追虫の髭のそよろに…　長塚節　170
白埴の瓶こそよけれ…　長塚節　172
妹が家も継ぎて見ましを…　天智天皇　173
秋山の樹の下がくり…　鏡王女　175
おほてらのまろきはしらの…　会津八一　176
毘楼博叉まゆねよせたる…　会津八一　178
暁のゆふつけ鳥ぞ…　式子内親王　179
閑なる暁ごとに…　式子内親王　181
萩寺の萩おもしろし…　落合直文　182
父君よ今朝はいかにと…　落合直文　183

しらぬひ筑紫の綿は…　沙弥満誓　223
世間を何に譬へむ…　沙弥満誓　225

十二月

ありがたし今日の一日も…　佐佐木信綱　227
西上人長明大人の…　佐佐木信綱　229
大君の命かしこみ…　防人　230
霰降り鹿島の神を…　防人　231
旅衣うべこそさゆれ…　橘曙覧　233
こぼれ糸綱につくりて…　橘曙覧　235
恋ひ恋ひて逢へる時だに…　大伴坂上郎女　236
留め得ぬ命にしあれば…　大伴坂上郎女　238
独りして堪へてはをれど…　半田良平　239
一日の或る時刻には…　半田良平　241
雨冷ゆるゆふべ俄かに…　松村英一　242
しづかなる明暮にして…　松村英一　243
田児の浦ゆうち出でて見れば…　山部赤人　245
ひむがしの野にかぎろひの…　柿本人麿　247
あとがき　251

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月

○初春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらぐ玉の緒（万葉集巻二十・四四九三）

大伴家持

天平宝字二年春正月三日、孝謙天皇は諸王諸臣を内裏の東屋に召して玉箒を賜い、肆宴をきこしめした。おのおの歌を作り詩を賦して奏上せよ、とのみことのりがあり、その時、右中弁大伴家持の作った歌だが、大蔵の事務が忙しくて奏上できなかった。

歌意は、「初春のめでたい初子の日に際して今日たまわった玉箒はちょっと手に取ってみただけで、もうその玉の緒がゆれて何ともいえずすがすがしい気持だ」、というくらいで明瞭である。

正月三日は丙子(ひのえね)で初子の日に当たっていた。この日は天皇はおんみずから玉箒をもって盃棚をお払いになり、また鋤鍬(すきくわ)をもって農耕のわざを示された。そうして豊年をことほぎ邪気を払って万民の福祉を祈願なされた。玉箒は正倉院に蔵されており、いつかの年の正倉院展に出陳されたことがあるから、見た人も多いと思うが、キク科のコウヤボウキという落葉の小灌木。春日、若草山などの裏がわの山地によく見うける雑草で、秋季枝先に白い花を咲かせ、それがほほけて年を越え春まで散らない。私の書斎には現にそれがいけてある。これをくくり束ねて飾りの玉を付けた美しくもかわいらしい箒である。正倉院御蔵の玉箒の傍に鋤があり、その一に「東大寺献天平宝字二年正月」の記号がある。まさしく家持がこの歌を作った時の鋤であることがわかる。

初春の初と、初子の初が重なっているけれど、けっして耳ざわりを感じない。むしろ快いしらべの前奏曲をなしている。「初子の今日」はその日がそれに当たっていたからだが、「の」の助辞をたくみにつかって玉箒と三句でちょっと息を入れ、それを受けて「手に執るからにゆらぐ玉の緒」と結んでいる。「からに」などは現代人が話しことばの中にさえつかっているが、玉箒の玉を貫いた緒がゆれて玉が触れ合う。その鳴りひびく音のこのように清くすがしく、とうとくも感ぜられるのは、単に流麗な歌調だけではない。また、奏上しなければならぬゆえに特に努力したというだけでもない。それもあろうが、やはり家持の人間だ。そうして家持の家系だ。みずから範を示して大伴一族を諭したりするほどの立場と、それにそれだけの年齢にも

達していた。いいがたき気品と荘重感あるすぐれた一首である。

あらたしき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事（同四五一六）

大伴家持

前の歌から一年経った天平宝字三年春正月一日、因幡国庁で国司としての家持が属僚郡司らに饗した時の歌。家持は二年六月に因幡の国守に任ぜられて都を去り、地方長官となっていたのである。

あらたしきはあたらしきで、どちらも新しきと記される。そうして「重け」は重なれである。歌意は、「新年となった、春のはじめだ。このめでたい春のはじめに降る雪のように、いよいよ吉事慶事が重なるように」、との願いをこめていて隠れた意味はなさそうだけれど、どことなくしらべに悽愴のおもむきが感じられる。新年を祝う吉祥歌であるにもかかわらず、それを感じるのは家持に対する同情のゆえであろうか。家持は新興藤原氏らの権勢に抗しかねて、天忍日命以来の栄えある名門大伴家の再興をはかりながら、しかもついに亡びゆく最後の人であり、また万葉集編集の功績者としての、そうしてこれは万葉集全二十巻最後の歌なのである。

私は戦争中、家族を鳥取県に疎開させていたが、昭和二十一年のそれこそまさしく正月の三日の日であった。鳥取市から四、五キロほどある宇部野村にそのまつりごとどころのあった国

府まで歩いて行った。雪深い道を行きなずみながら、五、六個の石をめぐらして、そこに建てられてある自然石の碑を仰ぎみた時、私は感慨に堪えなかった。荒涼たる風景だった。その歌をくり返しくちずさみながら、乞食のような格好をしているとはいえ、戦争が終わってはじめて迎えた正月だった。私は涙が流れて仕方なかった。

○

はるかなる岩のはざまにひとりゐて人めおもはで物思はばや（新古今集）

西行法師

巻第十二、恋歌二に出ているから、まさしくこれは恋歌である。西行は若くして出家遁世している。その原因を恋に破れたゆえだとする人もあるが、今はそのことに触れぬとしても、西行は恋歌を数多く作っている。

その家集『山家集』を見ても三十首ぐらい、また、五十首ぐらいの連作の他に「恋百十首」と題する大作もある。出家の身で何をなまぐさなというものもあるが、西行も人間だからと弁護するよりは、それが新古今時代というものなのだ。恋歌を作らないようなものは歌人でなかった。歌人の仲間に入れられなかった。

おそらくこの時代恋歌を作らなかったようなものは一人としていないはずだが、まして人一倍血の気の多い西行のことだ。恋歌を作るのはきわめて当然、その出家遁世にしても身や世を

はかなんでのそれではない。かえって自由にわがままにふるまいたいためのそれは積極的な生き方であったとさえ思わしめる。だからこそ繻衣(しえ)の身でありながら臆する色はさらにない。恋歌の百ぐらいは興あらばたちどころに作ったのである。

けれども西行の恋歌は、その四季自然の風物風景や、または孤独な彼の人間性や思想を歌った多くの歌にくらべて割合に人気がない。西行の恋歌など知れたものだと思っているようだが、これは西行研究の国文学者たちにも罪があり、また、万葉集一辺倒で、新古今集などをよく読みもしない現代歌人らの怠慢もあろうが、そうして確かに屑(くず)歌もたくさんあることだけれど、ここに挙げた歌など、どうして大したものだ。

「はるかなる岩のはざまに」は、人里遠く離れた山の岩の間にということだが、こう解釈すると元も子もなくなる。歌そのままの言葉で味わわねばならぬ。岩の間に身をひそめて、「人めおもはで」すなわち人に見られることなく、「物思はばや」だ。恋しい人を思いたいというのだが、万葉以来このころはまだ「物思ふ」というのは恋しい人を思うということで、現代のように、人以外のいろいろの物をいうのでなかった。ともあれはなはだ近代的な感じのする歌で、しずかだけれどその感情は強く端的に表現されていて、新古今集中恋歌の絶唱、これに及ぶものなしと断じたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com